

文学描写からみる地域—田山花袋がみた水辺—

井坂 優斗（群馬）

文学における表現から、作家が地域をどのように捉えてきたかがわかりうる。本報告では、それを活かし、文学における空間表現を通じた地域像の理解を試みる。

題材とするのは自然主義文学の大家として知られる田山花袋である。花袋は明治 4 年（1872）館林町（現群馬県館林市）生まれで、幼少期を館林で過ごし、明治 19 年（1887）に上京しているが、故郷やその付近の様子をたびたび自らの作品で描いた。さらに、全国各地を旅行し、紀行文を多く残している。

地方史研究協議会第 73 回(館林)大会のテーマであった“川合”・「里沼」の地域は、まさに花袋の故郷であり、『ふる郷』（新聲社、1898）などで特に印象深く描いている。花袋は利根川沿いの景観を好んでいたが、中でも故郷に近い群馬県邑楽郡千代田町赤岩の渡船場を評価している。紀行文「赤岩と妻沼」『山へ海へ』（春陽堂、1917）では、近代化から離れている赤岩のまちについて「文明から度外視されたよう」などとして感動を著し、小説『河ぞひの春』（春陽堂、1919）では赤岩渡船の近くを、文明からの逃避をして物書きをしにくるのに最適な地だとして描写しており、その風景をたいへん好意的に捉えている。

一方、第 74 回(兵庫)大会の場である兵庫県は、花袋の友・江見水蔭が住んでおり、『続南船北馬』（博文館、1901）などで水蔭を訪ねた際に兵庫県内を旅行した様子を著している。『日本一周 中篇』（博文館、1915）では、高砂町（現兵庫県高砂市）について、町として栄えている様子を見たあと、海辺の様子を「和船が無数に停泊していて、一種の小さな港のカラーをもっている」などと表現し、水辺への関心を記した。

花袋はこのように多様な場所の水辺を描写している。

本報告が特に注目するのは、河川や沼など、花袋の原風景ともなった水辺景観の描写である。花袋による全国の水辺に関する描写を比較し、明治・大正期における花袋が抱いた水辺の印象の差、共通点を見出すことで、当時の水辺の地域性について考察する。

行政記録などからだけでは把握し難い、一般市民目線での地域景観に対していただく印象の一端を知ること、当時の人々の感性を理解したい。